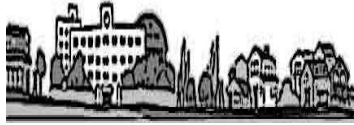




# 浜ぼうふう

～人，まち，自然が私たちの学校～



太夫浜小学校だより  
令和3年11月15日

<http://www.tayuhama-e.city-niigata.ed.jp/>

## 多様性を認める社会・学校

校長 野瀬 浩司

数年前に話題になった「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」(ブレイディみかこ著)という本を読みました。現在、「パート2」も出版され、売れているようです。

著者の息子は、アイルランド人の父と日本人の母をもち、イギリスの「元底辺中学校」に通う。学校の授業や行事、友達との関係などを中心に、人種差別・いじめ・経済格差などの問題に対して、親子で悩んだり考えたりしながら成長していく様子が、母の視点で語られている。

読んでみると、中学生の息子が非常に立派な考え方をするので。

例えば、国籍や膚の色に対する差別的な発言をする子が、逆に意地悪や無視をされた問題では、「反撃して傷ついて、また相手を憎んで反撃して傷ついて、また憎んで反撃して、それで終わりはどこにあるの?」と発言し、「やられたらやり返す」では、いじめ問題は解決できないと考えています。

また、中国人である先輩が、「イエロー」とからかわれた問題では、「日本人を母にもつ自分も一緒にいたから、先輩は許せなかったのだ」と理解しながらも、「ぼくは、自分を東洋人とは思っていない。どこかに属している気持ちになれない」とも言っています。つまり、人種差別も悪いが、偏った仲間意識も、それに属さない人たちを排除する懸念がある、と客観的に捉えているのです。

そして、この本の根底に流れている考え方が「**多様性を認めることの大切さと難しさ**」だと感じます。母(=著者)は、中学生の息子に言います。「多様性ってやつは物事をややこしくするし、けんかや衝突が絶えないし、ないほうが楽、でも、「無知を減らすからいいことなんだ」と。

同じ国籍や膚の色、同じ宗教や信条の人たちなどが集まれば、けんかや衝突は起こりにくいかもしれないけど、それでは、違う立場や考え方の人たちを理解する力が育たない(=無知)、ということなのでしょう。「**誰かの靴を履いてみる**こと」(英語の定型表現)が大事だということです。

近年、日本の社会や企業でも、性別・年齢・国籍・人種・障がいの有無などの多様な人材を登用・活用し、価値観やキャリア、働き方などの多様性も大切にする経営手法が推進されています。

様々な特徴や個性をもった子どもたちが集まる学校も同じです。**自分と何かが違う子であっても、その特徴や個性、考え方や行動を理解・尊重しようとする態度**を、全教育活動を通して育てていきたい

と思います(簡単ではありませんが)。「ぼくはイエローで…」の中で、母の実家に滞在中の「ぼく」が、たまたま店に居合わせた大人に、「YOUは何しに日本へ?」と、テレビ番組のセリフでからかわれる場面がありました。太夫浜小の子どもたちが、そんな大人にならないためにも。



3年生 雨の中で消防の学習